

文学史上で冷遇されている 自然主義文学を見直し、 評価を高めたい。

永井先生の専門は日本近代文学・文章表現で、田山花袋を中心とする自然主義文学の再評価を行っています。見たままを書いただけというネガティブな評価が定着している自然主義文学が、読み方をシフトすることで、実は様々な技巧を用いたり新しい表現を試みていることを見つけ出し、文学史上に新たな評価を加えようとするものです。絵画や写真などとの比較を通じて様々な視点から読むことで「新しい見通しが見えてきたときに充実感を感じます」と永井先生。今後は田山花袋と同時代の作家と、同時にアマチュアの書き手たちの文章を読み解くことで、従来の自然主義文学への固定観念を覆していきたいとのことだ。



文化創造学部講師 永井聖剛 【ながいきよたけ】

【学歴】
1991年3月 横浜市立大学商学部経済学科卒業
1995年3月 横浜市立大学文学部文芸学科卒業
1998年3月 早稲田大学大学院文学研究科修士課程日本文学専攻修了
2004年3月 早稲田大学大学院教育学研究科博士課程教科教育学専攻退学

【職歴】
1991年4月 INAX入社(1993年2月退社)
1996年10月 早稲田中・高等学校非常勤講師(のちに教諭)(2004年3月退職)
2003年4月 横浜市立大学国際文化学部非常勤講師
2004年4月 愛知淑徳大学文化創造学部専任講師

- 【永井先生の
主要著作・論文リスト】
○共著 □論文
- 「井伏鱒二全集索引」 双文社出版 2003
 - 「『田舎教師』・三人称を生きたる読者—ある同時代読者の読みをめぐる—」 日本文学協会『日本文学』vol.49 2000
 - 「ふたつの〈事実〉—水陸「十人斬」と花袋『重右衛門の最後』—」 日本文学協会『日本文学』vol.52 2003
 - 「自己表現の機構—島崎藤村『處女地』を視座とした表現指導の考察—」 早稲田大学国語教育学会『早稲田文学国語教育研究』第24集 2004
 - 「『無技巧』の修辞学的考察—田山花袋の文体練習と修辞学の動向をめぐる—」 愛知淑徳大学『愛知淑徳大学論集—文化創造学部篇—』第6号 2006
 - 「田舎教師の復讐—田山花袋『田舎教師』における自己肯定的方法—」 日本近代文学界『日本近代文学』第74集 2006



風

景描写、心理描写などというときの「描写」という語が、文章表現の場でごく一般的に用いられるようになるのは、いまからちょうど百年くらいまえ、日本近代文学における自然主義文学成立期のことです。リアリズム文学は、事実をありのままに書くことを重んじますから、その再現法としての「描写」が注目されたわけですね。ちなみに、今日わたしたちが目にする言文一致・三人称で語られる小説文体的な確立もまた、同じ時期のことです。私は、この「描写」という概念の生成過程と、その結実としての自然主義文学作品の分析を中心に研究活動を行っています。また、自然主義文学とは切っても切れない関係にある、自己言及の物語行為にも関心があります。

日本近代文学におけるリアリズムの歴史は、坪内逍遙『小説神髓』(明18)から語り始めるのが一般的ですが、私は、明治33年をたいへん重要な節目の年であると認識しています。というのも、正岡子規による「写生文」、小杉天外による「写実小説」の提唱がこの年のできごとであり、ま

た、島崎藤村が言語による「スケッチ」の練習を始めるのもこの年だからです。これらが、絵画のジャンルの術語を用いていること、そして、読書行為時における再現性を問題にしていることに注目しましょう。近代とは視覚優位の時代にほかなりませんが、彼らの動向は、文学の分野においても、視覚がとらえるものを中心に世界を構造化しようとする傾向が一気に噴出したことを物語っています。日本近代文学のリアリズムは、絵画表現とのアナロジーの中で発見され、構想されていたのでした。そしてもちろん、先ほどの「描写」もこの水脈の下流に位置しています。ただし、自然主義の作家たちは自分たちの方法を「写生」や「写実」とは言わず、あえて「描写」と名付けました。それはどうしてなのでしょう。その背景には何があったのでしょうか。「写生・写実・スケッチ」と「描写」はどう違うのでしょうか、そもそも、この前後に制度化された近代小説の文体とはいったいどんなものなのでしょう。私が大学院生時代から研究のテーマとしているのは、このようなことです。